



ジャーナリスト

兼高かおる

Kaoru Kanetaka

一九五九年から九〇年までTBS系で放映されたテレビ番組「兼高かおる世界の旅」。レポーター、ナレーター、ディレクター兼プロデューサーとして制作全般にかかわった兼高さんの移動距離は地球一八〇周分、現地取材は一五〇カ国に上る。番組終了後も東京都港区国際交流協会会長などを務めながら、国内外へ旅をつづけていらっしゃる兼高さん。挫折を経験した学生時代のことや、「世界の旅」をつづじて見えてきたものなどについて、率直に語ってくださいました。

「世界の旅」から学んだこと

医師やホテル経営を目指した学生時代

——一九五九年に始まり、九〇年まで続いた「兼高がおる世界の旅」は、日本で初めての本格的な海外取材番組として、今でも強く印象に残っています。兼高さんはどのような経緯でジャーナリストになり、世界の国々をめぐることになったのでしょうか。

兼高 私は一九二八年に神戸で生まれ、学生時代には英国系の東京の女学校に通いました。卒業したら人の役に立つ医者になるうと、四年生のときに帝国女子医学専門学校（現・東邦大学医学部）と他の医大を受験したのです。でも、落ちてしまい、五年生で薬学専門学校と聖心女子学院高等専門学校（現・聖心女子大学）を受験しましたが、これも落ちました。全然思いど

おりにいきません。その後、戦争（太平洋戦争）が終わると、世の中はガラリと変わり、もう勉強どころではなくなりました（笑）。

——医学や英文科の学校を目指したのは、ご自分のお考えだったのですか。

兼高 はい。進路はいつも、その時々自分の考えに従って決めていました。その後、「これからはホテルビジネス」と思ったらホテル経営で有名なアメリカのコーネル大に願書を送りました。子供の頃から、夏休みに訪れる鎌倉や山中湖、軽井沢のリゾートホテルの非日常性にひかれていたからです。しかし、「ホテル経営に関連する人を優先しているの」と丁寧な断り状が来て、

これもダメ。アメリカの日本占領が終了した二年後の一九五四年に、私はロサンゼルス市立大学に入学しました。ロサンゼルス市立大学で英語をブラッシュアップしながら経営学を学び、「しっかりと成績を修めてコーネル大に編入しよう」と勉強に熱中していました。

ところが、ハードな生活がたたり、急に痩せて体を壊してしまったのです。私は結核を持っていたので、発症すれば隔離病棟に入れられてしまいます。慌てて一時帰国しました。しかし当時アメリカに滞在するためにはスポンサーが必要で、その方が「病人のスポンサーはできない」と。私は大学に戻ることはできなくなりました。

——順調に道を歩まれたわけはないのですか。

兼高 順調にいかないのは慣

れています。でも、物事が思いどおりに運ばなかったとき、それにしがみつくか、「次の道がある」と思うのか。私は後者のタイプです。アメリカに戻れなくなったのは残念でしたが、それを悔やむ間もなく、日本を訪れた外国人にインタビューしたり、記事を書いたりする仕事を始めました。それがジャーナリストとして活動する始まりになり、外国人から世界の話を聞くうちに「自分の目で見る」と思うようになりましたね。

当時、映画の『八十日間世界一周』（注）ならぬ「八十時間世界一周」という飛行機での早回り競争にアメリカ人たちが挑戦していて、私も「面白そう」と思っていました。しばらくしてスカンジナビア航空が東京とデンマークのコペンハーゲンを結ぶ航路を新設したことを知り、「それ

を利用すれば八〇時間内で世界を回れる」と友人らに話すと、「兼高さん、やってみようよ」と背中を押されたんです。出版社の協力も得られることになり、とんとん拍子に私が世界一周にチャレンジすることになりました。

(注1) まだ飛行機がない時代に、一人の英国紳士が二万ポンドを賭けて、気球・鉄道・蒸気船などを利用して八〇日間で世界一周を目指す物語(ジュール・ヴェルヌ原作)

——兼高さんを世界一周に送り出そうと周囲が盛り上がったのは、当時の日本に元気があったことも関係しているのでしょうか。

兼高 関係あると思います。当時、私の周囲の人々は、戦争に負けたと落胆するよりも、戦争が終わった嬉しさのほうに先に立っているように見えました。街には活気があふれ、戦時中は読むことができなかったアメリカの月刊誌を求める人々で長蛇の列ができていたりしていました。

「八十時間世界一周」の私の挑戦は一九五八年のこと。東京から南回りでマニラ、バンコク、カラチ、ローマ、チューリヒなどを經由してコペンハーゲンへ

飛び、そこからアンカレジ経由で東京へ戻ります。マニラでは、空港に市長さんがいらっしやうて、バンドの演奏やサンパギータ(フィリピンの国花)のレイで華やかに迎えてくださいました。戦時中に日本が占領した国の首都ですから、私は出発前にいい話を聞かなかつたのですが、実際に行ってみたら、全く違うイメージで大きな笑顔で迎えてくれました。

チューリヒの空港に羊がいて、「なんてのどかなのかしら」と微笑ましくなったり、北極を越えるときには海が凍っているのを見て興奮したり。結局、七三時間九分三五秒で世界一周に成功しました。そんな短い時間で世界の一部を見るだけでも、世界とはこんなに人も景色も温度も違うことを実感しました。

帰国すると、多くの報道陣が私を待ち構えていました。私の世界一周の時間は、新記録だったからです。私は急に名を知られる女性となり、ラジオ東京(現・TBS)から仕事が舞い込み、世界各国について事情に詳しい

方々にインタビューするラジオ番組を担当させていただきました。番組は好評で、世界一周をした翌年の一九五九年、今度はテレビ放送を始めてまだ四年目の同局から「世界の旅」の仕事をお願いしたのでした。同局の社長(足

——「世界の旅」は何人のチームで取材されたのでしょうか。

兼高 私とディレクターとカメラマンの三人です。私自身は、レポーターやナレーターの役割のほか現地では、ディレクター兼プロデューサーといった役目も果たしました。海外取材番組は日本で初めてでしたから、仕事の仕方を教えてくれる人もいません。でも、かえって型にはめられることがなく、自由でした。取材先は私が自分で交渉し、番組の方向性も取材しながら決めていくことができたからです。

——当初、兼高さんはテレビ画面に登場しない予定で番組が始まったそうですね。

兼高 私は取材をして番組を制作

立正氏(注2)は日本の発展は世界との交流にかかっている、と見抜いていた方でした。

(注2) 王子製紙社長を経て、戦後はラジオ東京創立に当たり取締役社長に就任。日本商工会議所会頭などを歴任。

普通の人々の衣食住を紹介する番組に

——「世界の旅」は外国に行っているのだから、自分が登場する気は全くありませんでした。ところが、建物や木などの大きさを分かりやすく見せるために、その比較の道具として、ときどき私も画面に出ていたら、テレビ局とスポンサーから「ずっと出てください」と。兼高さんが出たほうが、視聴者は親近感を持つてくれます」というのです。番組名も当初は「世界飛び歩き」でしたが、「兼高かおる世界の旅」に変わりました。

——番組のスタートから二五年目に出版されたご著書『兼高かおる旅のアルバム』(講談社刊)を拝見すると、南アフリカでダチョウの背中に乗ってみたり、スイスを訪れたときは気球でア



かねたか・かおる ● 1928年神戸生まれ。女学校卒業後、ロサンゼルス市立大学に留学。58年にスカンジナビア航空主催の「世界一周早回り」で73時間9分35秒の最短記録を樹立。59年から90年まで「兼高かおる世界の旅」(TBS系)を放映、レポーター、ナレーター、ディレクター兼プロデューサーで活躍した。外務大臣表彰、菊池寛賞、文化庁芸術選奨、国土交通大臣特別表彰など受賞多数。91年紫綬褒章受章。現在、日本旅行作家協会会長、淡路ワールドパーク ONOKORO「兼高かおる旅の資料館」名誉館長、東京都港区国際交流協会会長などを務める。著書に『私の好きな世界の街』(新潮社)、『わたくしが旅から学んだこと』(小学館)他多数。

ルプスを越えたりしていらっしやいますね。

兼高 ジャーナリストとして私の名前を出して番組を制作する以上、私が見たことや体験したことを、私の言葉で視聴者に伝えなければいけません。ダチョウに乗ったり、アルプスの上空を気球で飛んだりしたらどうなるか、そのリアクションも私をとおして伝えましたがナレーションに当たっては、たくさん信頼できる資料に目をとおしました。

けれども、もし視聴者の方が、私の訪れた場所で同じことを体験しても、違う見方や感じ方をするかもしれません。ですから、講演

などでは「あの番組はあくまで私の目で見た『世界の旅』です。別

の方が旅すれば違う見方もあるはず。皆さん、自分の目で確かめるためにぜひ外国に行ってくださいね」とお話ししています。

——取材中の思い出として楽しいこともあれば、苦しいこともありますか。

兼高 苦しくて嫌なことは何回かあったかと思うのですが、不思議なことに今は全部忘れてしまっ

ていい思い出しか覚えていませんね。番組では、できるだけその国の普通の人々の衣食住を紹介したいと考えていました。国というものは、普通の人々で成り立っている

からです。一国の大統領にも取材

しましたが、むしろ一般の人の暮らしぶりを見聞きするほうが、その国の事情がよく分かります。取材するときも、一般の方々にはポイントメントなしでお話を聞いたり、ご自宅にうかがったりしました。事前にポイントメントを入れておくと、お話の内容を用意されたりして、よそ行きの取材になっ

てしまうからです。——「遠い日本からよく来た」と、食事などで歓迎されることもありましたか。

兼高 はい、よくありましたね。全く言葉が通じないところでは、とにかく笑顔で心を通わせて、ジ

エスチャーで意思の疎通を図りました。その場に楽器があったら弾いてみたり、みんなが踊っていたら輪の中に飛び込む。そして、出していただいた食べ物は、よほどことがない限り食べる。戦前育ちの私はお腹が丈夫です。何を食べても平気でした。

そんなふうになんと接しながら、多くの国を自分の足で歩いて気付いたのは、「アジアは一つ」「世界は一つ」などと安易には言えない、ということなんです。例えば日本では、日本語が全国どこに行っても通じます。でも「一つの言葉の国」は、じつは世界では少ない。英国のよう

に小さな国でも、スコットランドやウェールズには独自の言語があつてその文化を尊重しています。アフリカの国に行けば、種族ごとに異なる言葉があり、一つの国に一〇〇以上の種族がいる所もあります。各国における言葉の状況を見ても、それだけ多様なのですから、「アジアは一つ」などどくくることはできません。アジアは地図上では一つのエリアに区分けされています。でも、実際は気候も人種も、



価値観も生活習慣も違う地域の集まりなのです。

宗教の違いによって争いが起こることもありますね。私は「世界の旅」の番組制作を三二年つづけてきましたが、その間、いつも世界のどこかで争いが起こっていました。その状況は今も変わりません。理由は人種、宗教の違い、このごろ

世界の旅をつうじて見えてきた日本

——日本の若い世代が内向き志向になっていると言われます。海外に行く若者も減っているようにうかがわれますが、どうやらなりませんか。

兼高「世界の旅」の取材を始めたころは一ドル三六〇円の時代です。一流企業の初任給が九〇〇〇円（二五ドル）ほどでしたので、海外に

は資源も大きな要素になっていきました。地球上はずっと大荒れに荒れている、と言えらると思います。世界の平和を実現するためには、どちらが正しいとか、悪いでなく、価値が異なるということの人々が認め合う。それが大事ではないでしょうか。

行ける日本人はほとんどいませんでした。今は、アルバイト代で週末に近隣の海外へ食べに行ったり泳ぎに行ったりすることが可能です。それでも出掛けられないのは、「日本にいるのが楽」という気分なのででしょうか。日本を出てみると、目が覚めたように自分が持っている能力が活発化して、もっと楽しい人生になるのに、それに気が付かないのでしょうか。今の若い人たちにも、どんどん外国に出掛け行ってみてほしい。

そして、外国に行ったときは、日本人としてのマナーを大切にしたいと思えます。その国の習慣やタブーを守ることはもちろん、

日本人としてのマナーで相手に接してもらいたいのです。私たちの世代は、各家庭でしっかりとマナーをしつけられました。「世界の旅」の取材では、そうした日本の礼儀、作法がとても喜ばれました。日本人には普通に見える所作でも、外国の方からは美しく見えることがあつて、私のお茶の飲み方を「ビューティフル！」と称賛されたこともあります。

ただし、現在の日本の家庭で、どれだけマナーのしつけがされているかには大いに疑問があります。テレビなどを見てみると、行儀の良くない子供が登場したりして、ひやりとすることがあります。これは、元をたただせば現代の日本の住環境に原因があるのかもしれませんが。東京の住宅では居住空間が狭く、父親の書斎などがある家は少ない。今は、狭い家の中で親の威厳もなくなり、親と子が同等に見えます。六〇年前なら男性は、一家を構える年齢になれば、ある程度の広さのある家を借りられました。かつてのように二世帯、三世帯で十分な居住空間のある家に住み、賑わいとしつけのある暮ら

しができると思えます。
——インターネットを使えば日本の自分の部屋から外国の情報を手に入られます。それだけで世界を旅した気分になってしまふのかもしれない。

兼高 情報があふれ、簡単に手に入る時代だからこそ、自分の目で見て、耳で確かめ、そして考えて答えを出すこと、できればそれを文に書いてみるのが大事だと思います。私は、アメリカ留学で、そして世界を旅することで、日本のことを知らない自分に気付きました。

それから日本について学び、日本の良さを知ったのです。外から日本を見ると、日本のいいところは守らなければいけない、一方、ここは直したほうがいいというように考えることにつながります。若者に限らず、日本人が世界を旅して自分なりの見聞を広めれば、自分のためになるのはもちろん、ひいては日本のためにもなるはず

です。
——本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。